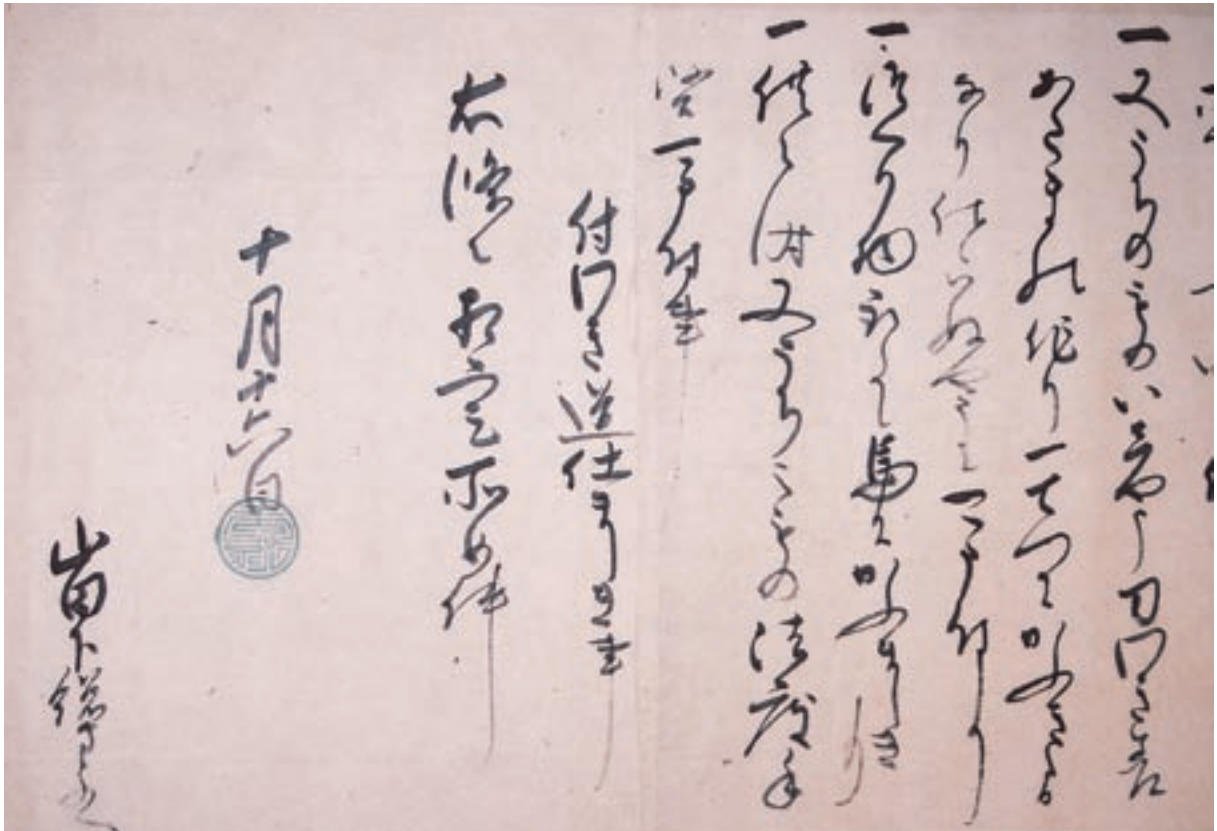


山口県史だより

第22号／平成17年10月

特集 萩藩の初代藩主は誰？



毛利秀就の青印（寄組山田家文書、山口県文書館蔵）

特集 萩藩の初代藩主は誰？

さて問題です。萩藩の初代藩主といえは誰でしょう？。……、答えは毛利秀就です。「ええーっ！ 輝元じゃないんか、おいっ！」という反応をされた方も多いのではないでしょうか。今回の特集では、一般にはやや印象の薄い毛利秀就について、幾つかのエピソードを紹介して人物像の一端に迫りたいと思います。なお、詳細については、今年の三月に刊行した『史料編 近世2』および『近世1』をぜひ御覧になってください。

■毛利秀就と父輝元

毛利秀就は、文禄四年（一五九五）に輝元の第一子として生まれ、慶安四年（一六五一）に萩で亡くなりました。彼が生きた五〇余年は、関ヶ原戦や大坂の陣を挟んで、戦乱の世から和平の世へと、大きな変化を遂げた時代でした。また防長二か国へ減封となった毛利氏にとって、藩の諸制度の整備・確立が急がれた時期でもありました。

父の輝元は、関ヶ原戦後まもなく隠居して「宗瑞」を名乗り、幼い藤七郎（秀就）に家督を譲りました。次第に覇権を確立する徳川氏に対して忠誠を誓う意味で、秀就が「証人」（人質）として在江戸することになったのは、慶長六年（一六〇一）。まだ七歳のときのことでした。緊迫した時代が、年端もいかない子どもに父母と離ればなれの生活をさせたのです。想像すると、思わず目頭が熱くなりませんか。

さて、当時の萩藩は家臣団の多さに加えて、六か国返租問題や幕府の普請役等々により、財政は火の車でした。その一方で萩築城や城下町

の建設をはじめ、藩政の整備を進めなくてはなりませんでした。隠居したとはいえ、実質的には輝元が毛利氏の当主（藩主）として、家臣団をまとめて、山積する諸問題に取り組んでいきました。

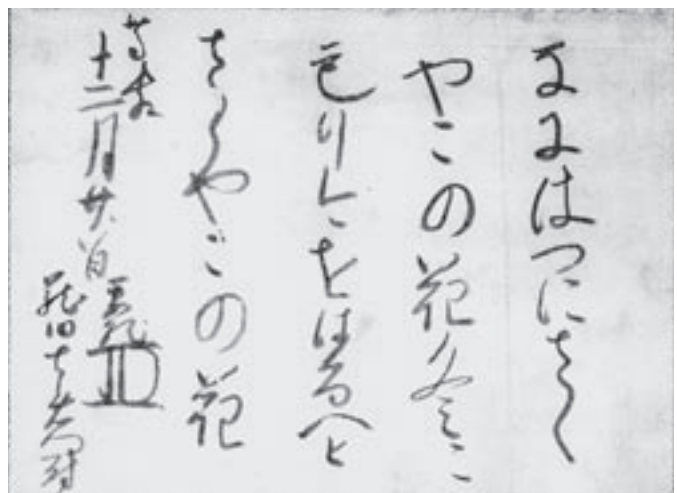
■秀就の江戸での生活

江戸の藤七郎には、間次まきつぎとして幕府との折衝に当たった福原広俊のほか、益田元祥や堅田元慶、お守役として国司元歳や叔父にあたる兎玉景唯などの重臣のほか、多数の家臣が随従していました。

秀就には、毛利氏の当主或いは大名としての「帝王学」を身につけさせなくてはなりません。知識人や側近たちによって、必要な教育がなされたと思われます。なかでも「手習い」は日々稽古していたのではないのでしょうか。下の写真のように、江戸に随従した家臣の家には、同様の文書が伝来しています。

■若殿様のお国入り

慶長十六年の暮、秀就が初めてお国入りを果たすときがやってきました。慶長八年に参勤し



秀就の手習い（蔵田満男氏蔵） 「手習ふ人の始めにもしける」（古今集仮名序）とされた「難波津の歌」です。慶長9年のもので花押の練習もしています。

て以来、輝元は首を長くしてこの日を待っていたと思います。大きく成長した我が子との再会です。さぞやうれしかったことでしょう。

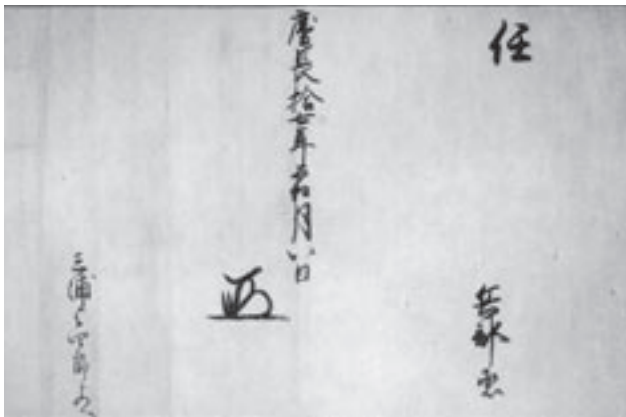
秀就は、藩主として領内へのお披露目である「御国廻り」を行ったほか、諸行事をこなして、慶長十八年には再び江戸へ戻りました。在国した約一年の間に、家臣への加冠状かかんじょうや一字書出いちじしゅしゅなどの判物に単独で署名したほか、家臣の知行を保証する安堵状にも輝元とともに署名しています。この機会に、輝元は秀就へ「領知権」（藩主の権限）を委譲しようとしたのですが、秀就が断っています。自信がないというのが理由だと思われませんが、親に言えない理由が……。

■「肝焼き」息子

息子の行状を知らせる福原広俊の手紙が届いたのは同年三月。簡単に紹介すると、「秀就は藩主の器じゃない。やんちゃのし放題で、このままだと毛利の家が危ない。」というところでしょうか。毎日のように明け方まで酒盛りをして、お昼近くまで起きてこない。そのため、来客への応接や諸方面に宛てる書状等の対応が遅れてしまう、と。実は、初入国中にも広俊は「秀就の行儀について直接意見してほしい」と輝元に伝えたのですが、改まる気配がないため、より具体的な内容を書いたのです。また在国中の秀就は、「高飛車な態度で臨めば威厳が保てる」という知人の話を鵜呑みにして行動していたた



毛利秀就受領書出（右田毛利家文書）



毛利秀就官途書出（三浦家文書）



毛利秀就仮名書出（同上）

いずれも山口県文書館蔵。
家臣の家格によって、判物の形式が異なっていたことがわかります。一門の右田毛利氏には、日下（年月日の下）に名前と花押が記されていますが、大組の三浦氏には日付の奥に花押のみが記されています。
また、寛永期に入ると、宛所（宛名）よりも高い位置に花押が据えられたものも登場します。

め、周囲の者や領民を恐れさせていたのです。

行く末を案じた父輝元は、長府藩主毛利秀元に息子の行儀について指導を依頼し、本人にも二一箇条にもわたる教訓書を書いたりもしました。後継ぎがちゃんとしないので、親は死んでも死にきれません。このうち輝元は体調を崩しますが、寛永二年（一六二五）まで持ちこたえたのは「肝焼き」息子のお陰かもしれません。

■秀就の後半生

寛永の初年は、輝元の依頼を受けた秀元が後見役として藩政に関与しました。やがて秀元と秀就の実弟就隆（徳山藩主）による幕府普請役の拒否や別朱印の問題（將軍から本藩とは別に領知朱印状を拝領し独立することを画策）など

から二人と秀就は疎遠な状態となりました。

寛永九年からは、秀就が藩政の舵取を担うことになりました。寛永から慶安にかけて、度重なる普請役の負担や鎖国などの幕府の諸政策や島原の事件への対応のほか、財政難への対応として家臣の給与をカットした正保の二歩減など、厳しい藩政の運営が要求された時代でした。もちろん毛利一門をはじめとした有能な家臣にも支えられて、彼の時代に基本的な政策が次々と打ち出されていきました。

慶安四年の彼の死がもたらした藩内外への波紋を考えると、若い頃はやんちゃのし放題だった秀就も、萩藩の初代藩主を立派に務めたと言えるのではないのでしょうか。
(河本)

人々の動きを復元

『通史編 原始・古代』では、様々な時代の人々の活動をイラストで復元し、掲載することになっています。

山口県の遺跡をモデルに、岩宿時代（旧石器時代）の狩猟風景、縄文時代の集落や弥生時代のコメづくりの様子、古墳の築造過程など、躍動感あふれる人々の姿を垣間見ることができるよう工夫する方針です。

（担当 河村・徳本）



イラストの下絵づくり

古代部会

意外と近い？

奈良東大寺の大仏を铸造するのに美東町長登の銅が使われていました。ということ、長登から奈良まで銅が運ばれていたことになりました。

運搬方法やルートを確認することはできませんが、長登から小郡まで陸路を利用したとすれば徒歩で約五時間。そこから樫野川を利用したとすると、仏坂の峠を除けば、小郡までは比較的歩きやすい道が続きます。

（担当 石風呂・山本美）



明治期に仏坂に掘られたトンネル

中世部会

和歌から見える中世社会

この御代はにしの海よりおさまりてよもにはあらし波風もなし

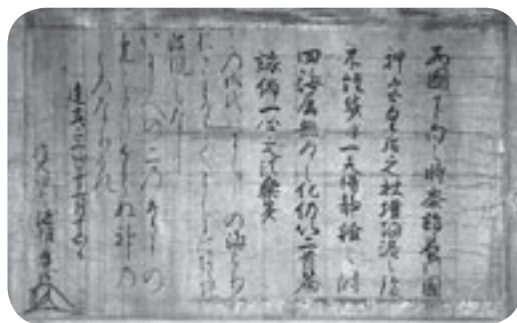
足利尊氏は、建武三年（一三三六）

後醍醐天皇方に敗れ、九州に下る途中で、忌宮神社に戦勝を祈願しました。

翌年、勢力を挽回して入京した尊氏は、感謝の意を込めて、この和歌を同神社に奉納したのです。

三十一文字の優雅な文芸からも、当時の人々の信仰の様子や歴史の一面がうかがえます。

（担当 今地・阿武・中司）



足利尊氏筆「豊浦宮法楽和歌」（下関市忌宮神社蔵）

近世部会

浜崎の須子家

伝統的建造物群保存地区に指定されている萩の浜崎は、かつては港町として栄え、藩の御船倉や浜崎宰判の勘場も置かれていました。

下の写真は、須子家で保存される長持で、「北国問屋」年寄 須子清九郎「安政二」などの文字が書かれています。同家に伝来する文書の詳細調査はこれからで、町の実態にアプローチできると期待しています。

（担当 河本・松島・宮崎）



往時を偲ばせる須子家の長持

近 代 部 会

昭和初期の観光客誘致

明治期以降の鉄道網や道路網の整備、地域開発の進展にともない、県内各地の景勝地や温泉地が観光スポットとして意識されるようになりました。

昭和八年（一九三三）一月には、駅・商工会・旅館などを中心に防長観光協会が設立され、その事務所が小郡駅に置かれました。そして、絵葉書・写真帳・遊覧案内などが作製され、観光客誘致が盛んに繰り広げられていきました。

（担当 浅川・伊藤）



『防長之観光』（県立山口図書館蔵）より

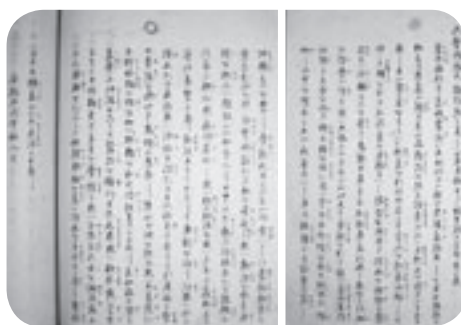
明 治 維 新 部 会

猖獗をきわめた流行病

安政五年（一八五八）八月から九月にかけて、防長全土で突如伝染病が蔓延しました。その死者数は「浦日記」によれば、萩市中で三四二人、諸郡においてはは一五九八人にも上りました。

その正体はコレラで、病氣退散を願う神社への祈禱や空砲発射などが行われました。こうした中で活躍したのが蘭方医で、彼らによりそれに対する予防・治療法を記した板本が出されています。

（担当 土井・里谷・宮本）



流行病に対する予防・治療法
（『浦日記』山口県文書館蔵）

民 俗 部 会

トルツメ

「トルツメ」、「ブラサゲ」、「オンビキ」、「ダーシ」。これらはどういう意味の言葉でしょうか？ 実はみな校正に關係する用語なのです。

民俗部会では、現在『資料編 民俗2』（暮らしと環境）の刊行に向けて校正作業を進めています。

因みに「トルツメ」とは、文章中の不要な文字を削除して次の文を前にツメる指示、「ー」はオンビキ、「ー」がダーシです。

（担当 村岡・小本）



校正作業の様子（編さん室）

現 代 部 会

『現代4』刊行に向けて

『史料編 現代4』（平成十九年度刊行予定）は産業経済編であるため、企業関係の調査を行うことが多くなっています。

貸借対照表や損益計算書などからなる有価証券報告書や、社員に向けて発行された社報を年月ごとに見ていくことで、戦後の企業の変遷はもとより、山口県経済の変遷が浮かび上がってきます。

（担当 関谷・古屋・山本香）



調査の一コマ（宇部）

「教えること」と「学ぶこと」

財団法人防長倶楽部理事長 松野 浩二



吉田松陰が松下村塾で教えたのは、実質一年間に過ぎなかった。その塾風は先生と生徒ではなく、共に学ぶ同志のような関係であったという。

そこで松陰が最初に教えたのは、関ヶ原の戦いであった。この戦いこそ長州藩の原点であるという考えからである。しかし、それは一般的な歴史の教え方、つまり知識の集積ではなかった。

松陰は「その時、君だったらどうしたか」と質問し、その答えを皆で討議したのである。そこには先生も生徒もなかった。

さらに続いて、「今、関ヶ原の無念を晴らすために我々はどんな行動をとるべきか」と設問し、各自が「私はこうする」と意見を述べ、それを皆で討議した。

そこには、本から知識を得ることに汲々とした学問のやり方を超えた、生きた学問があった。

それは、当時の明倫館の教授方法からは「自分の死すべき所」を知ることではできないと悩んでいた高杉晋作を自覚させた「学び方」であった。その日から晋作は「松下村塾に行つてはならない」という祖父と父の目を盗んで松陰のもとに通つたのである。

同じような教え方と学び方を実行した私塾が京都にあった。石田梅岩の「石門心塾」である。梅岩は身近なものを何でも教科書としたが、彼が繰り返ししたのは本ではなくて「自分で考えて、実行する」ことであった。百の理屈よりも一つの実行であった。

私は今の教育のあり方について云々するつもりはない。しかし、時代は確実に変わり始めている。自分で考えて行動しないと、国も会社も個人もその流れから取り残されるという懸念から、私は逃れることができない。

(防府市出身)

地域に根ざす・21



阿知須郷土史研究会

この会は、郷土の自然、歴史、産業など、いろいろの分野において「地域の宝」を調査、研究することに、興味・関心をもつ同志の集まりである。

二〇〇一年発足し、今年は五年目。この間、講演会、旧跡などの探訪、共同研究、個人研究の発表など、毎月の研修会を中心に行ってきた。その他、協賛事業にも参加している。

「講演会」は、郷土史研究の事例、幕末期の農業経営、大地の成立、埋蔵文化財など、講師を招聘して実施。「旧跡などの探訪」は、史跡、文化財、農業関係の開発跡、伝説の里、寺社など。「共同研究」は、地名の研究、戦前の商店街マップづくりなど。「個人研究の発表」は、中世の郷土史、古文書の解説と郷土の諸事象、異文化体験、地質調査、北方八幡宮の由来など。「協賛事業」は、子供の週末活動を支援する教育委員会の事業に協賛し、史跡などの探訪、体験学習、活動のまとめのマップづくりなどに参加。

以上のような研修活動の歩みをまとめて、毎年会誌『あゆみ』を発行している。この会誌（A4判、五〇頁程度）は、編集、印刷、製本すべてが会員の手作りである。大変な作業であるが、年々の節目を大切に、研修活動を大きく育てるために、みんなで頑張っている。

会の運営は、会員一人一人の発想を大事にして、肩の凝らない楽しい会であることをモットーにしている。

(会長 高重等)

事務局

山口市阿知須飛石北区 河野昌博

TEL 〇八三六一六五―二三五四

会誌『あゆみ』



史跡・信仰・民話の里 須田河内地区を歩く

行啓記念碑と加護谷祐太郎

「大正の名建築」山口県旧県庁舎の向正面の植栽の間に、高さ約一・三メートルの小さな記念碑がひっそりとたたずんでいます。大正十五年（一九二六）の皇太子行啓にちなんで建立されたこの記念碑は、山口県の特産品として高名であった美祿郡秋吉産の大理石で組み立てられています。中央には大阪市の造幣局で鑄造された銅製銘板がはめこまれ、当時の県知事大森吉五郎の撰文が陽鑄されています。

小柄ながらも神殿風の気になるデザインをまとったこの記念碑の設計者は、東京帝国大学出身の建築技師加護谷祐太郎です。記念碑建設工事の関係書類に添えられた図面右隅の「加護谷」の印鑑がそれを裏付けてくれます。当時の建築家は、橋や記念碑のデザインにも腕をふるっていたのです。

加護谷は、明治の東大寺大仏殿修理工事の指導者として知られていますが、大正十二年竣工の日本赤十字社山口支部病院の工事顧問技師として山口の近代建築史上にもその名をとどめています。また、帝都復興院や東京市役所の建築技師として関東大震災後の東京再生にも関与しています。（浅川）



行啓記念碑（正面、昭和2年竣工）



記念碑の図案
「東宮殿下行啓記念碑建設工事一件」（山口県文書館蔵）

刊行準備進む『通史編 原始・古代』

『山口県史 通史編』は、平成十八年度刊行予定の『原始・古代』を初巻に、計六巻の刊行を予定しています。

『原始・古代』では冒頭で「人と環境」と題し、近・現代までを視野に入れ、人々の生活カレンダーとしての歴史の舞台に自然を大きなテーマとして取り上げます。

県土山口の地形や気候がはぐくんだ、豊かな自然環境と「生態系の中の人」はどのように向き合ってきたのでしょうか。将来に向けてどのように融合・調和すべきなのでしょうか。「人と環境」ではその素材を提供します。

また、原始・古代部分では、本県ではじめて人々の活動痕跡がみられる時代から、院政開始前年の応徳二年（一〇八五）までの山口県の歴史的な歩みや特性等を叙述します。

以下の編構成で、現在執筆を進めています。

- 第一編 人と環境
- 第二編 最古の狩猟民
- 第三編 土器のある暮らし
- 第四編 稲作の始まり
- 第五編 大王陵の造営
- 第六編 周芳・穴門とヤマト国家
- 第七編 周防国・長門国と律令国家
- 第八編 律令社会と産業
- 第九編 律令国家の変容と周防国・長門国
- 第十編 周防・長門地方と東アジア
- 第十一編 周防・長門地方の文化と信仰



石城山神籠石調査（光市）



イラストの打ち合わせ



掘り出された埋没林（阿武町宇生賀）

県史刊行の

お知らせ

▼今後の配本予定巻についてお知らせいたします。

『資料編 民俗2』（平成十七年度末刊行予定）は「暮らしと環境」をテーマにして、暮らしにもつ山口県の「民俗の骨組み」を明らかにしようとするものです。「山村」「漁村」「農村」という環境条件の異なる地域社会ごとにモデル地区を設定し、現地調査により集積した各種データをもとに、それぞれの地域における「民俗」を浮き彫りにします。

『史料編 幕末維新3』（平成十八年度刊行予定）は、幕末期の政治・社会状況を明らかにするため、寄組士浦鞆負（うらづまおにえ）の日記を収録します。浦は家老として藩政の中枢にいた人物であり、その政務に関する記述からは、政権の内部構造や政策決定などが分かります。また、家中諸家との交際や浦家の所領経営などの記事からは、武家社会を含めた幕末期の社会状況などを把握することができます。

どうぞご期待ください。

こちら 県史編さん室

▼県史編さん過程の調査研究成果等を発表して、県史編さんに対する理解を深めていただくとともに、地方史研究の発展に寄与するため、研究誌『山口県史研究』を毎年三月に発行しています。

これにより、新しい研究成果や動向等も分かりますので、ご購入をお勧めいたします。

▼『山口県史』及び『山口県史研究』のお申し込みは、左記あてにお願いいたします。

〒七五三-1850-1 山口市滝町一番一号 山口県刊行物センター内
山口県刊行物普及協会 電話（〇八三）九三三-二五八三
FAX（〇八三）九三三-九一三九

▼県史編さん室ではホームページを開設し、編さん事業の概要や既刊本等の紹介をしています。アドレスは左記のとおりです。

<http://www.pref.yamaguchi.jp/gyosei/kenshi/index.htm>

山口県史の構成・刊行計画（全42巻）

【通史編】 6巻

原始・古代
中世
近世
幕末
近現代
現代

【民俗編】 1巻

【史料・資料編】 33巻

- 既刊 考古1（原始）
既刊 考古2（古代以降）
既刊 古代（古代史料）
既刊 中世1（記録）
既刊 中世2（県内文書1）
既刊 中世3（県内文書2）
中世4（県外文書・在銘資料）
既刊 近世1（政治1）
既刊 近世2（政治2）
既刊 近世3（経済1）
近世4（経済2）
近世5（文化）
近世6（諸家文書1）
近世7（諸家文書2）
既刊 幕末維新1（政治・社会1）
既刊 幕末維新2（政治・社会2）
幕末維新3（政治・社会3）
幕末維新4（政治・社会4）
幕末維新5（経済）
既刊 幕末維新6（軍事）
幕末維新7（文化）
既刊 近代1（政治・社会・文化1）
近代2（政治・社会・文化2）
近代3（政治・社会・文化3）
既刊 近代4（産業・経済1）
近代5（産業・経済2）
既刊 現代1（県民の証言 体験手記編）
既刊 現代2（県民の証言 聞き取り編）
既刊 現代3（言論・文化 ブラング文庫）
現代4（産業・経済）
現代5（政治・社会）
既刊 民俗1（民俗誌再考）
※17 民俗2（暮らしと環境）
- 【別編】 2巻
統計
年表・索引

※を付けた数字は刊行予定年度

山口県史だより 第22号

平成17年10月5日発行

編集・発行／山口県史編さん室

〒753-8501 山口市滝町1番1号

TEL 083-933-4810

FAX 083-928-2705